

保育基礎ゼミ及び保育専門ゼミにおける 保育実践力の向上を目指して — 保育内容「環境」の視点から —

Basic Childcare Seminars and Specialized Childcare Seminars enabling learners to Acquire Practical Skills with a Perspective of “Environments” in the Ministry's Childcare Curriculum Guideline

増井啓子・阪本さゆり
Keiko MASUI & Sayuri SAKAMOTO

要旨

令和5年度よりカリキュラム化された保育基礎ゼミ・専門ゼミの計画と意図および取組の実際を通して、学生の保育実践力がどのように向上したかを明らかにすると共に、今後もより充実した内容にすること、協力園とのよりよい関係性を構築することを目指して、どのように改善するのかを、「環境」を視点に明らかにする。

キーワード：保育観察 幼児理解 保育ドキュメンテーション 環境

はじめに

奈良保育学院では、令和5年度より保育専門職課程における学生の保育実践力の向上を目的として、新たに保育基礎ゼミ及び保育専門ゼミという講座を設定して取り組むこととなった。

2年間の履修課程の中に位置付けられた保育実習及び教育実習だけでは、十分な実践力を身に付けて保育現場に出ることが難しいことに加えて、令和5年度より学校法人白藤学園の傘下に「おおみやこども園」が入り、附属幼稚園・おおみや保育園・おおみやこども園の幼児教育機関3園が揃ったことが大きな理由である。これら3園との協力関係を構築しながら保育実践力向上を目指すことが、学院の教育環境の充実に繋がるとともに、強みとすることができれば、奈良県内の保育専門職養成機関として、より重要な役割を果たすことができるものと思われる。

初年度は、教育課程の中に位置付けられた時間の活用方法、3園との連絡調整や学生の学びの状況把握と効果的な指導方法、専門ゼミにおける保育ドキュメンテーションの作成とその効果、成果と課題を次年度にどうつなぐかという3点を明らかにすることを目標として取り組むことにした。

I 保育基礎ゼミと保育専門ゼミの目的と取り組み方

1 学生の幼児理解力を確かなものに

教育実習（第一段階の2週間）を経ている2回生において、その経験から幼児理解力がどの程度身に付けられているかを確かめてみたところ、2週間の保育実習と教育実習では、幼児を理解できるところにまで至っていないのが実態であることが分かった。そこで、幼児の特性や発達段階及び

それぞれの思いや願いがどのようなものであるかを捉えるために、保育を観察して記録を取るという基本からスタートすることにした。そして、保育観察を積み重ねる中で、視点をもって保育を観察し、幼児の思いや願いを読み取る力を身に付けられるようにする。このことは、幼児教育における幼児理解の大切さを学生に認識させることにも繋がると考えた。

そこで、まず保育基礎ゼミ・専門ゼミの意義と保育を観察することの大切さなどについて理解させることから始めることにした。

2 観察記録の取り方と振り返りの大切さ

観察記録用紙は、自由に書けるようにするために、形式を作らず、A4の用紙に日付と時間・場所以外、自由に書き込めるものとし、3～4行程度の振り返りの欄を入れた用紙を作成した。また、保育を見る視点については、こちらから視点を与えるのではなく、観察者が振り返りの中で、自分はどんな視点で観察したのかという気づきと学びを得られるように、ゼミの話し合いの場（振り返り）を大切にすることにした。

自由な記述をさせようと考えた理由は、予め視点を与えると観察しようとする学生の姿勢に柔軟性がなくなることを懸念するためである。観察するという行為自体に柔軟性と一人一人の感性が働くようにしておくことで、「こういう点に注意すればいいな。」や「今日は、幼児のつぶやきを拾ってみよう。」というように、幼児の行動の捉え方や記録の取り方の工夫などが生まれ、振り返りの場での学びに繋ぐことができるのではないかと考えた。また、イラストを入れたり図式化したりしてもよいということを伝えておくことで、自分にとって分かりやすい記録としての工夫が生まれることを期待した。

一方、振り返りの場では、進行しながら言葉を添えたりポイントを確認したりする者と、発言内容を板書整理する者というように、ゼミを指導する教員の役割を分担した。そうすることで、学生の学びが整理され、観察するときのポイントや視線の置き方への気づき生まれ易くなるのではないかと考えている。また、この時間を大切にすることによって、振り返りの大切さが学生に理解されると共に、観察力や表現力が高められることにも繋がると考えている。

3 保育基礎ゼミと保育専門ゼミとの違い

保育基礎ゼミは、保育を観察し、記録することを中心とし、観察に慣れてきた段階で、協力園の要請に応じて環境作りの実習や行事等の準備・補助にも取り組ませてもらい、体験的な学びも得られるようにする。そうすることで、協力園にとってもメリットを感じていただけるようにし、連携・協力の関係性がよりよい形に発展できるようにしていきたいと考えている。そのためには、計画のすりあわせや活動の打ち合わせなどを教員同士で行い、限られた時間をより充実したものにするよう、また、幼児と学生の信頼関係構築にも繋がるようにしたい。

保育専門ゼミでは、観察記録をとりながら、タブレット端末で幼児の行動や表情、保育の様子などを写真でも記録する。基礎ゼミで培った観察力によって、幼児の遊びや保育の中で生まれる思いや願いの変化の瞬間や、エピソードの一端を切り取り、保育ドキュメンテーションシートにまとめる。出来上がった保育ドキュメンテーションには、見出し（テーマ）を付け、写真から読み取れる

幼児の思いや願い、エピソードと共に、感じ取った幼児の成長ぶりなどを紙面にわかりやすくまとめる。

そして、まとめた要点を振り返りの時間に交流して、幼児理解を深めると共に保育者の意図や効果的な援助のあり方等についても話し合えるようにしていきたい。

Ⅱ 保育基礎ゼミ・専門ゼミでの取組の実際

1 保育基礎ゼミ・専門ゼミの計画

今年度の2回生は、前期に保育基礎ゼミ、後期に保育専門ゼミとして行う。毎週火曜日、三園に分かれて1単位時間（90分）行き、保育観察記録をとる。次の1単位時間で記録の整理と振り返りや話し合い活動を行う。記録を整理する際には、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に照らして、幼児一人一人の学びや育ちの様子を確かめるようにするとともに、どのような学びが得られたかを確かめられるよう指導・支援した。

授業計画（下表の「年間活動計画」参照）では、保育観察までのガイダンスと準備期間（4月7日～4月25日）を設定して、観察記録をどのように取るとよいのか意識づけを行った上で、取り組ませるようにした。その結果、戸惑うことなく、学生は記録を取ることに専念することができた。また、園側の保育計画との調整は、教員と園長・副園長で行い、園側の要請・要望（行事協力、園外保育の保育補助、環境実習）には、各グループで柔軟に対応するようにした。

《保育基礎ゼミ・専門ゼミの年間活動計画（各園での観察は5月から）》

回	月日	活動内容	活動の具体
1	4/11	ガイダンスとアンケート	ゼミの趣旨と概要を説明。幼稚園・こども園・保育園の違いを理解させ、行き先の希望を調査（園・何歳児）
2	4/18	保育観察記録の必要性和作り方	保育観察記録の重要性を理解させるとともに、観察する際の保育の見方や記録の取り方などを指導する。
3	4/25	グループワーク	写真や動画等を活用して、幼児の姿（エピソード）の記録の取り方、グループでの振り返りの方法など共通理解をする。
4	5/2	保育観察	各園への持ち物・道順の確認、注意事項（服装や身だしなみ・言葉遣い・名札等）などを指導する。記録の取り方を各自確認しながら記録してみる。（練習）
5	5/9	保育観察記録作成	午前：保育を観察して記録（2～3人のペアでメモを取る者と写真を撮影する者に役割を分担）する。 午後：観察記録をもとにドキュメンテーションを作成し、振り返りと話し合いを行う。
6	5/16	保育観察記録作成	午前：保育観察記録作り 午後：ドキュメンテーションの作成と振り返り
7 ～	5/23	保育観察記録作成	午前：保育観察記録作り 午後：ドキュメンテーションの作成と振り返り
15	7/25	前期のまとめ	作成したドキュメンテーションをもとにKJ法を用いて幼児の姿、言葉（事実）から、育ちと学びを見取る。 ◎保育者のねらい、関わり、環境を考える。 ◎保育には様々な見方や方法があることを知る。

16	9/12	保育観察 保育補助	ドキュメンテーション作成 学びの振り返り
17	9/19	保育観察 運動会補助	ドキュメンテーション作成 学びの振り返り
18	9/26	保育観察 運動会補助	ドキュメンテーション作成 学びの振り返り
18 ～	9/26 ～10/17	保育観察 運動会補助	ドキュメンテーション作成 学びの振り返り
21 ～	11/7 ～12/19	保育記録 環境実習	ドキュメンテーション作成 学びの振り返り
29	1/9	表現活動発表準備	保育学院と三園の幼児の出番の練習、確認（ならほフェスティバル）
30	1/11	表現活動発表リハーサル	自分の出番や衣装の確認と最終打ち合わせ
31	1/12	表現活動発表会	保育学院学生と三園の幼児で表現活動を発表
32	1/16	後期の振り返り	後期の活動を振り返り、保育者として身に付けたい資質・能力についてグループで話し合う（KJ法）。
33	1/23	後期のまとめ	

これまでの授業で学んだ幼児の発達の様子や遊びの知識、保育者の援助のあり方、保育者としての視点などを念頭に置くことを意識づけた。そして、学生自身にとっても見る人にとっても分かりやすい保育観察記録を作成することを通して、保育を見つめる目を養うと共に幼児の思いや願いの表出される場面を捉え、心の動きを読み取るよう指導した。

学生は、園での観察実習や環境実習など様々な保育体験を通して「幼児を知る」ことからスタートした。中でも「遊び」を中心として観察することによって、幼児を取り巻く保育環境の意味が分かり、幼児理解へとつながっていくのではないかと考えている。様々な保育場面を観察することを通して、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」と関連付けながら観察記録を通して保育を省察し、保育者に求められる「幼児の育ちを意識した働きかけ」とはどのようなものなのか考察するよう意識づけた。

保育記録の出発点となるのは、保育観察を行っている学生自身の心の動きである。日常の楽しいことは誰しも記録しておきたくなるのと同じように、日々の保育の中で「こんな姿が見られた」という驚きや喜びが、記録に向かう際の重要な動機となるのではないかと考える。

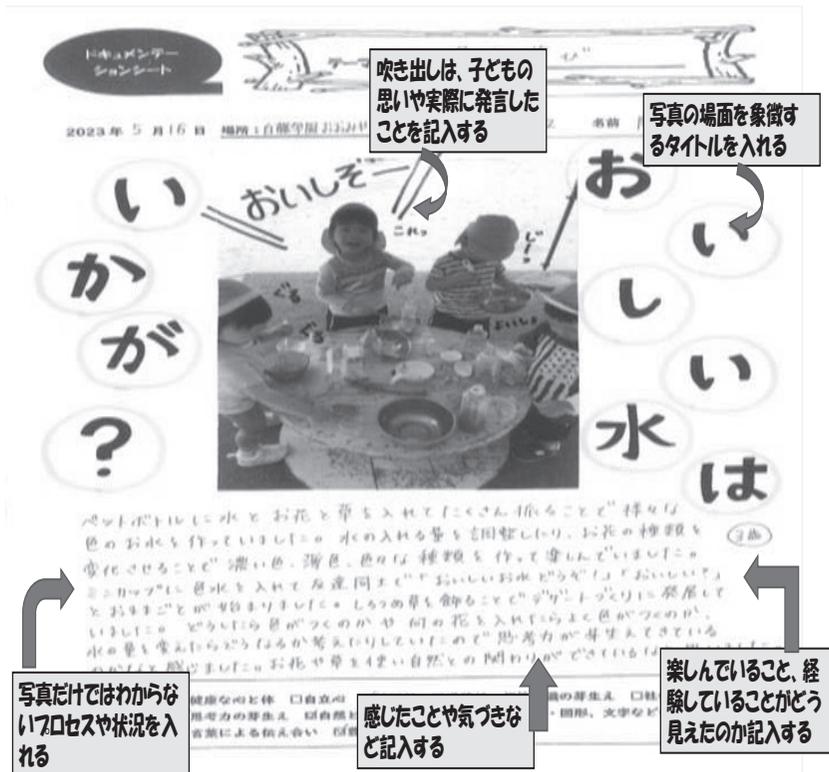
2 保育観察の記録方法

まず、記録写真と絵や図で活動のポイントを焦点化し、幼児自ら考えようとする気持ちを育むための保育者の関わりや環境構成を捉える。次に、その日の保育活動の様子を文字や絵、写真でレイアウトする。このような手順に慣れるまでは、撮った写真の中から1～2枚を選んでプリントアウトしたものを用紙に貼り、その横に簡単なメモを書くことから始めた。

保育ドキュメンテーション作成の前に、簡単に自分の撮った写真についてグループでやり取りする。なぜその写真を選んだか、振り返りでその写真を見ることによって、その時・その場での心の

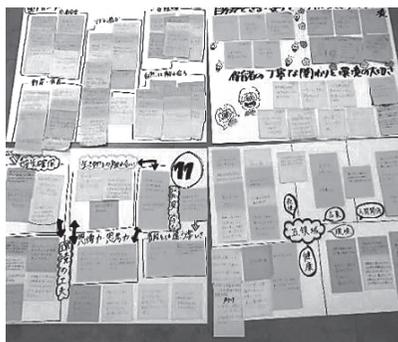


動きを探りだす手助けになる。写真を見ながらどんな場所にいたのか、遊びの状況や読み取りを説明する。グループトークで出た意見を念頭に置き、写真を配置し、実際に幼児が発した言葉やつぶやき、担当保育者の関り、自分自身が読み取ったことなど記入していく。次に作成した保育ドキュメンテーションをもとに気づきを発表する。指導者は、学びを深めるために発表に対するフィードバックを行う。こうすることにより、最初は「何を撮ろうか」と考えるだけで大変だったが、次第に幼児の姿の面白さやポイントが見えてきたようで、学生同士の気づきが深まったり、新たな発見があったりなど考えが深まっていった。毎週継続して、保育現場に行くことで、学生と幼児との対話のチャンスも生まれている。



3 学生同士の学び合いの実際

保育ドキュメンテーションの写真は、幼児が何を考え、何を体験しているのかエピソードを共有する手段であるため、回を重ねる中で、次第に状況がよく分かるように作成できるようになっていった。しかし、短い限られた時間での作成であり、学校法人内の3園でグループに分かれて保育観察を行っているため、2回生全員で保育について語り合える場を設けられていなかった。そこで、各期のまとめの段階で、付箋を思考ツールとして利用した「KJ法」を用いて、保育観察記録の作成による成果を確かめ合う場を設定することにした。具体的方法としては、まず学生を4～5人のグループに分け、学生自身が保育観察を通して読み取った幼児の姿・保育者の援助・環境構成を付箋に記入する。次に、付箋に書いたことについて理由を説明しながら出し合い、「取り皿法」を使って分類する。



KJ法の良い点は、まず自分なりに書き出すことによって「先に同じ意見を言われたらどうしよう。」といった不安がなくなるだけでなく、自分事として全員が話し合いに参加できる点にある。また、すでに自分の意見を書いているため、他の学生の意見を自分と比べながら受け止めることができる。似た意見をまとめて付箋をグルーピングすると、比較が容易になる。カテゴリーごとに内容に合った見出しを付け、まとめた結果からグループごとにタイトルを付ける。次に、グループで話し合ったことを発表し合う。学生全員が感想をコメントラベルに記入し、質疑応答を行うことによって、共有した情報をさらに深めていく。図表作成や他グループの発表を通して学んだことをも



とに再度、一人一人が自己評価を行うとともに、問題点や課題を整理することとした。グループ内での話し合いでは、学生一人一人が、自分にはなかった見方に触れ、視野を広げる機会となった。

同じ体験をしてもそれぞれ観察したポイントも異なるため、KJ法は、学生の学びを次のステップに繋ぐために有効であるといえる。こうしたプロセスが、学生自身の保育観を高めるために重要な働きをすると考える。写真という共有しやすい媒体があることで、保育ドキュメンテーションが重要なツールとなる。

しかし、今回の取組では、提案の未熟さもあり、全体的に感想にとどまっていた。また、発言しやすく互いの意見をきちんと受け止めるのに適切なグループの人数は、3～4人であることも分かった。それ以上の人数にすると、自分の意見を述べずに終わる者が出たり、グループ内での発言が聞き取りにくかったりする。話し合いに適した環境、意見を出しやすい雰囲気づくりなど、話し合いの基礎基本を大切にすることと、主体的に学び合う姿勢をつくっていくことが大切である。

4 保育ドキュメンテーションから読みとりの実際へ

記録を取るうえで大切にしたいことは、保育の考え方が「環境を通して行う保育」であり、「幼児の環境との関わりはどうか」「幼児が関わる環境はどうか」といった幼児と環境に視点を置いて写真を撮影することである。幼児の発言を大人の頭で変換して説明的に書くのではなく、できるだけ幼児の生のつぶやきや言葉をありのままに記録するように心がけることを学生に伝えた。また、生き生きとした幼児の様子を残すためには、カメラ目線の写真ではなく、それぞれの自然な姿の中から、保育者の関わりや願い、つなぎたいこと、語りたいたいことが見えてくるのではないかと考えた。

重要なことは、幼児の姿を見つめ直し、幼児理解をさらに進めること、記録に残された幼児の行動からその意味を捉え直すこと、環境への関わりを読み取っていくことなど、学生の思考を「見える化」することである。

5 保育「環境」と保育ドキュメンテーションの関係

幼稚園教育の基本として幼稚園教育要領(2017)の総則で「幼児教育は」「幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行うものである」と述べている。同様に幼保連携型認定こども園教育・保育要領(2017)の総則でも「乳幼児期全体を通して、その特性および保護者や地域の実態を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とし」と述べている。また、保育所保育指針(2017)の総則でも(保育所の役割として)「保育所における環境を通して、養護及び教育を一体的に行うことを特性としている」とする。この「環境を通して」の意味を、幼稚園教育要領解説(2018)では「幼児が生活を通して身近なあらゆる環境からの刺激を受け止め、自分から興味をもって環境に主体的に関わりながら、様々な活動を展開し、充実感や満足感を味わうという体験を重ねていくことが重視されなければならない」と解説している。また、幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説(2018)では「乳幼児期は心身の発達が著しく、環境からの影響を大きく受ける時期である。したがって、この時期にどのような環境の下で生活し、その環境にどのように関わったか、将来にわたる発達や人間としての生き方に重要な意味をもつ」としている。さらに、保育所保育指針解説(2018)では「幼児は、身近な人やものなどあらゆる環境からの刺激を受け、経験の中で様々なことを感じたり新た

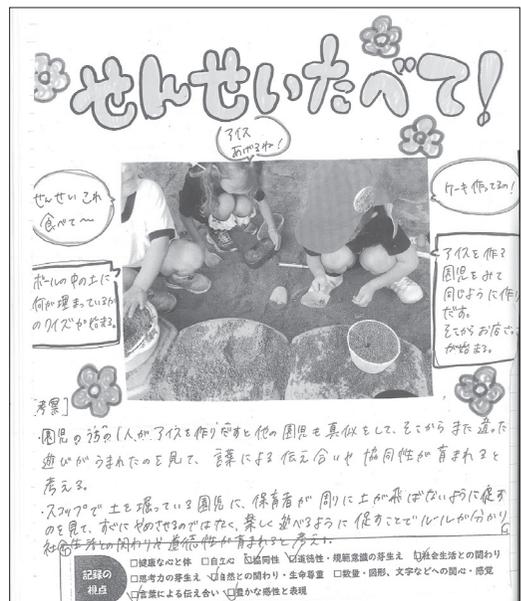
な気づきを得たりする。そして、充実感や満足感を味わうことで、好奇心や自分から関わろうとする意欲をもってより主体的に環境と関わることになる」と解説する。

幼児が育つうえで幼児を取り巻く環境はとても重要である。そこで、幼児にとって環境とはどのような意味をもっているのか、幼児と環境との関わりという視点から幼児の育ちを見ていくことにした。また、記録を幼児理解につなげていくためには、幼児の言動を中心に、それに付随する表情や視線などを観察するとともに、外見だけでなく内面を見ることも大切にしたい。

6 具体的な事例から分かる保育ドキュメンテーション作りの効果

事例1 遊びたくなる環境

5月 3歳～5歳児





活動時は花の特徴や植え方、世話の仕方などの絵やクイズなどを学生が作成して、幼児の興味や関心を高めた。3歳児から5歳児を対象に行った。各年齢に応じて説明内容を考えた。

【学生の気付き・学び】

- ・パンジーとピオラの違い、特に3歳児は花の大きさに感動していた。5歳児は花の大きさだけでなく花びらの形や模様、花の香、根っこの様子などに興味を示した。3,4歳児は質問を口々に発しているが、5歳児になると手を挙げて発言をしていた。
- ・植え方について、3歳児は具体的に場面ごとに説明していく必要がある。苗をポットから外す場面では、優しく、大事に外すという表現では分かりにくく、実際に保育者がやって見せる、言葉だけではなく動作も入れることで同じようにしようとする姿が見られるなど、年齢によって関りや援助の難しさを感じた。
- ・継続して幼児と関わっていくことで、水やりや草抜きをして花を育てていく大切さを感じた。幼児が主体的に関わることができる環境を作っていくことで、見付けたり気付いたりできると思った。幼児にとって身近でいつも目に付くところにプランターや植木鉢などを置くことで、幼児の興味・関心を上げられると感じた。
- ・保育者として花や野菜を育てる際には、「栽培の知識を得る」「季節を把握する」ことも大事で、栽培活動を通して幼児にどのような体験や気付きをしてほしいのか、保育のねらいや環境づくりも大切であることが分かった。

【保育ドキュメンテーションの振り返りから】

- ・一連の活動の中で何を幼児が経験し、何を感じたのか教えることに夢中になっていると保育者の指示が多くなってしまう。
- ・苗植えを通して花よりも土の中から出てきたダンゴムシや幼虫などに興味を示す幼児もいるので、栽培活動を進めていく中でたくさんの「ふしぎ」「なんで」などと思う気持ちを大切に、共に考えたり調べたりしながら学びの目を育てていくものだと感じた。
- ・実際に種や苗の状態から見て、日々触れて観察することで、多くの気付きや発見につながる。
- ・栽培活動を通して繰り返し継続的に関わることで、その物の特徴などが分かる。また、どうすれば花が咲いたり実がなったりするのか毎日観察したり調べたりするなど、家庭でも話題にすることで興味が広がっていき、お互いに伝え合うなど、思考力の芽生えにつながっていく。

○その後の活動として (かぶの種まき)

環境実習
(化成肥料を混ぜる)
・工作用「ブルーシート」の上に土を盛り、農薬用のスコップ、子ども用のスコップを貸りて土を混ぜる。赤土は1ヶ所はまわめる。

作りか
赤土(砂が混入)
【底が見えないくらい】

3歳児
・その場で説明
・先ほどと同じように混ぜて、
・自分で穴をあける。
・自分で穴をあける。
・かぶの種を入れる。
・土をよそす。
・ほうろこで水をやりをする。

5歳児
・最初に全て説明する。
・大きな何と自分から作る。
・自分で穴をあける。
・黒い青い種が入る。
・「エロク団だ」
・物から入って次の作業へと移る。

リレー(運動会に向けて)
・赤黄青組に分かれてリレーをする。
・保育者の補助があり順番通り進む。
・暑さ・風速の違い。

3歳児
・最初に全て説明し自分から作る。
・子どもが同じく作る。
・雨のよそすをして水をやり、
・月とこころにしてもらうと、
・種が水で入る。
・地球を使いながら作る。
・子どもは説明する。



事例3 運動会に向かう活動 9月 5歳児

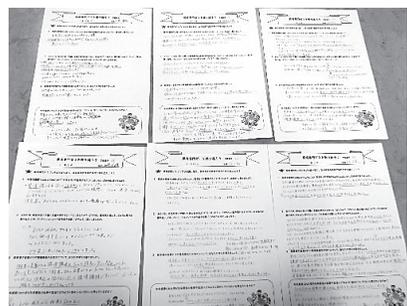
自分のやりたいことに向かって、のびのびと遊びを楽しんでいる。保育者は、認めたり、励ましたりして、友達と共通の目的をもち、運動会に向けて挑戦しようとする気持ちを大切にしている。

練習中は「みんなとっても上手だね!」「家族にはよく見てもらいたいね!」など、幼児のやる気を引き出すような声掛けや、運動会が待ち遠しくなるような関わりが見られる。5歳児では、幼児同士が力を合わせて達成できるようパラバルーンや少し難しいフラッグなど取り入れられている。

また、全員で取り組む意識をもたせるために、5歳児にプログラムの紹介や道具の出し入れなどの役割を任されている。練習を通じて助け合いの気持ちが芽生えたり、目標に向かって努力したりと、友達と力を出し合って協力する姿が見られた。幼児の好奇心をとらえ、やってみようという意欲を引き出すためのきっかけづくりから始まり、練習の過程を通して、徐々に幼児の思いを引きつけ期待感が膨らむようにしかけていく様子を記録した。

うになった。10の姿と比較することで経験している内容が分かるようになった。

- ・保育を観察する際、幼児の表情などから気持ちを読み取り、記録することを意識した。
- ・保育ドキュメンテーションを作成する際に、幼児がつくった作品に対して、幼児の言葉を想像し吹き出しを書いたり、気持ちを表現するのに吹き出しを活かしたりした。
- ・保育者は、幼児にどのように育ってほしいと思って行動しているのか、どのような思いで言葉がけをしているのかなど、気を付けて観察することで、10の姿と結び付けて観察できるようになった。
- ・保育ドキュメンテーションを作成する際に、幼児が発した言葉が分かりやすいように吹き出しの形を変えた。
- ・幼児の姿の何を観察するのか、なぜこう思っているのかなど、幼児の思いを推測することで、より学びが深まった。
- ・保育専門ゼミでは毎週幼児と関わることができたので、季節の環境や、季節の幼児の遊びなどよくわかった。また、幼児の姿を常に意識することで、幼児がなぜそのような言葉を発したのか、動きや表情を読み取ることで、幼児同士の関係性や、保育者と幼児との関係性など理解できるようになった。
- ・保育ドキュメンテーションを作ることによって、やって終わりにせず、グループで振り返りをする中で、いろいろな角度での物の見方や考え方があったことが分かった。
- ・保育ドキュメンテーションは、写真を通して幼児の活動過程を見える化しているため、育ちや学びに結び付けやすく、幼児理解が深まった。



Ⅲ 実践力の向上と評価および成果と課題

1 実践力向上の検証

保育基礎ゼミと保育専門ゼミが奈良保育学院のカリキュラムに入ったのは今年度初めてのことである。そのため、取り組んだことの成果として、はっきりした検証の結果が十分存在するわけではない。しかし、保育ドキュメンテーションの作成過程において、文章表現力や幼児の見方に変化が表れていると感じている。例えば、幼児の表情から自信をもって取り組んでいる様子を感じ取ったり、保育者の意図が表れていることをとらえられたりできていることが、保育ドキュメンテーションのコメントの中に記述されている。このような変化を実践力向上の表れと価値づけたいと考える。次年度以降、様々な場面での活躍ぶりからさらに検証できることを期待したい。

2 評価

① 自己評価

保育ドキュメンテーションには、「幼児の育ちの読み取り」を記録する。そのため、このシートに記述されている内容で学生の実践力の育ちが評価できる。幼児理解がどこまで出来るようになったのか、思いや願いを読み取ってどのような援助ができたのかを、自分なりに評価させたい。

実際に保育者となった際には、自分の保育を省察し保育を改善するところまで求められるという点も踏まえ、これからも保育ドキュメンテーションの作成に取り組ませていきたいと考えている。また、仲間と共に保育について語り合う機会を大切に、自分なりの保育観が育つよう、また、保育専門ゼミの振り返りを大切な活動として学生が捉えられるよう指導したい。

② 学生の学びの姿の評価（評価規準の設定）

学生が保育基礎ゼミ・保育専門ゼミの学習にどのように取り組んでいるかを、評価するため、下表のような評価規準を設けて評価することにした。

《保育基礎ゼミおよび保育専門ゼミにおける評価規準について》

	知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
1 回 生	<p>○保育記録を取る意味を理解し、自分なりに工夫して分かりやすく記録を取っている。</p> <p>○幼児が身近な環境に主体的に関わり、試行錯誤したり考えたりしている姿に気付くことができている。</p>	<p>○幼児の遊ぶ姿や生活の様子を観察することを通して、幼児の思いや願いを読み取ったり保育者の意図を感じ取ったりしている。</p>	<p>○保育観察を通して、自分自身の保育観や保育力を高めていこうという思いをもって取り組んでいる。</p>
2 回 生	<p>○自分なりの視点をもって保育記録を取ることができ、工夫して分かりやすく記録を取っている。</p> <p>○幼児が身近な環境に主体的に関わり、試行錯誤したり考えたりしている姿に気付くことができている。</p>	<p>○幼児の遊ぶ姿や生活の様子を観察することを通して、幼児の思いや願いを読み取ったり保育者の意図を感じ取ったりしている。</p> <p>○観察記録をもとにして、幼児の成長やストーリー性を感じたエピソードを切り取って、ドキュメンテーションを作成することができる。</p>	<p>○「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」に照らして、幼児一人一人の学びや育ちの様子を確かめるとともに、自分自身の実践力向上に取り組んでいこうという意欲を高められている。</p>

3 成果と課題

① 成果

- ・観察記録として保育ドキュメンテーションを作成したことによって、学生は観察の視点を明確にもてるようになった。また、その結果として、幼児の思いや願いを読み取る力を身に付けることにつながったといえる。
- ・保育基礎ゼミや専門ゼミの時間に対して、当初は意欲的な姿があまり見受けられなかったが、前期の後半になると幼児に会えることや、どんな保育が見られるのかという期待感などが感じられるようになった。
- ・初期は、事実だけの記録にとどまる観察記録であった。しかし、徐々に学生個人の個性と工夫が感じられる記録へと変化していった。環境構成をイラストで表現したり、遊びごとに枠で囲んで全体を記録したり、記録用紙の裏側にまでびっしりと書かれるようになった。
- ・写真で記録することで、記録を整理する際の学生同士の楽しげな対話生まれ、保育ドキュメンテーションにどのように表すと分かりやすくなるか、相談する姿が増えた。
- ・見出しの付け方を指導することで、保育ドキュメンテーションが生き生きとしたシートになった。イラストを入れたり着色したりという変化も現れ、楽しく保育ドキュメンテーション作りが進められていくようになっていった。
- ・手当たり次第に写真を撮影するというよりは、幼児の活動の様子をよく見て場面を選んで撮影していることが伝わってきた。保育を見る目の育ちが感じられる。
- ・徐々に幼児と学生の関わりも増え、互いに会えることを楽しみにしたり別れを惜しんだりする姿に変化した。
- ・幼児の作品の掲示や壁面構成、砂場の整備、畑作りなどの環境実習も体験させて頂くことができ、教育実習に向けた意欲や意識の高まりが感じられた。
- ・保育の観察を通して、年齢による発達段階の違いをはっきりと認識できた。座学での学びで得た知識が、保育観察によって実感を伴う理解に変化したといえる。

② 課題

- ・園との打ち合わせの時間を十分確保できず、とにかく観察して帰ることになってしまうことが多かった。取組が初年度で手探りになりがちになることは予想されたことであるが、コミュニケーションの大切さを思い知らされた。
- ・2コマ目の授業時間であるため、幼児の自由な遊びの姿を観察する機会が少なく、設定された保育の観察が多かった。様々な場면을観察させていただけるよう、次年度は時間設定の改善が必要である。
- ・学生のグループワークの機会を増やし、互いが学び合うことと同時に話し合う力の育成も必要である。
- ・指導する教員の学ぶ姿勢や意識のもち様が問われると感じている。このゼミを通して、学生にどのような力を身に付けさせるのか、保育ドキュメンテーションを作成する意義は何なのかを共通理解しておくことが大切である。

おわりに

今年度の保育ゼミは初年度ということもあって試行的な側面の強い取組となった。しかし、保育ドキュメンテーション作成時にみられる学生の表現力の育ちは大きく、それなりに成果があったと手ごたえを感じている。学生の気付きや学びから読み取れる幼児理解力の伸びについても同様に、保育観察を積み重ねることで、保育のどこをどのように見取るとよいのかを口頭で伝えるより、実体験を伴う中での自分なりの見方考え方の育ちとして身に付けられたと評価できる。

次年度は、この取組が協力園にとっても学院にとっても意義のあるものとなるよう、組織間の連絡調整やコミュニケーションがスムーズに行えるよう、工夫したいと考える。

参考文献

文部科学省（2018）幼稚園教育要領解説

厚生労働省（2018）保育所保育指針解説

内閣府、文部科学省、厚生労働省（2018）幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説

小学館（2020）日本版保育ドキュメンテーションのすすめ

新評論（2018）スウェーデンに学ぶドキュメンテーションの活用